

と亭主はいひました。
 其夜、亭主は母親の眠つてしまつた後で、そつと起きて、娘に宛てた手紙を書きました。そしてその手紙を知合ひの工夫に持たせてやらうと思ひました。其手紙には、お前が親に相談もしないで家を出たのは重々悪いことであるが、私達は今それを彼れ此れいひたくはない。たゞ一旦嫁になつた以上は決して家へ歸つて來るとは思ふな、世間には鬼がない自分の心一つで何んなにもなるものだ：：私は當分お前に逢ひたくはないが、もしお前が私に逢ひたいと思ふならば春になつて訪ねて來るが、逢つてやつてもいゝと、いふことなぞが書いてありました。

往來にも山にも雪が降りつもりました。冬になつてからは毎日／＼雪が降りつゞけたので、峠の邊は一丈も其餘も積りました。晴れると堅雪になつて

堅まつた雪の上にもまた降積るので、山も河も谷も道も一面の雪で、何處やらさつぱり解らなくなつてしまひました。

正月に入つて珍しく雪が晴れました。

町買ひの人達が茶屋の前を行つたり來たりしました。店にはおのぶといふ妹が坐つてゐて、木綿の布や、駄菓子などを賣つてゐました。店の前を通る人達は大きな娘がゐないので皆な物足りないやうな顔をして行きました。夫婦は南部にゐる娘が何時遊びに來るかと思はばかりを楽しみにしてゐました。母親は峠の方から下りて來る客があれば、誰れでも捕へて、娘を見なかつたかとききました。十日からまた雪が降りだして來ました。毎日々々青空を見ることが出來ないほど降りつゞけました。然し十六日の朝に雪がからつと晴れて新しい天地が生れて來ました。眞白な雪の上に日光が明るく反射してゐるので、眩しく眞正面に外を見られない位ででした。

夫婦は今日こそ娘が遊びに来るだらうと朝から楽しみにしてゐました。母親は娘の好きさうな馳走をこしらへてゐました。親父は雪拂ひを持って街道を掃きながら、店から遠い峠の方まで行つて見ました。峠を下りて来る馬子達は親父にお辭儀をしながら、不思議な顔をして親父の身體を見上げました。親父は雪拂ひを持って自分の家へ方へ歸つて來ました。

『まだおきよは見えませんか？』
と母親はききました。

『見えない。朝何んなに早く立つても晝飯時でなければ着くまいて。』

『それや、然うですね。何うしても晝飯過ぎになりますね。そんなところにぼんやり立つてゐないで鱈でも焼いたら何うです？』

と母親は親父を叱るやうにいひました。

午後になつても娘は來ませんでした。三時頃からまた雪が降り出して來た

ので二人はもうがつかりして、お互に物を言ふのもいやになつたといふ風に爐邊に坐つて、燃えてゐる火ばかり眺めてゐました。店にゐるおのぶは時々品物の値段などをきいても親父は返事もしないほどでした。

夕方から雪が益々烈しく降り出して來ました。夫婦とおのぶとは元氣のない顔をして夕飯を食へましておきよに食へさせるつもりで焼いた鰻を三人して食へてしまひました。

親父は行燈をつけさせて早く寢床へ入つてしまひました。母親は娘と一緒に店を閉めたり、後片付けをしたりして、これも無言で寢てしまひました。外は大吹雪で、雪の粉が家の中へも吹き込んで來るほどでした。戸や雨戸が風にあほられて烈しい音をたて、今にも吹飛ばされさうです。娘のおのぶは晝の疲れで間もなく小さないびきをたて、眠つてしまひましたが、夫婦は寒さと失望で長い間寢つかれませんでした。

夫婦がとう／＼と寝つかうとする頃、表の戸を叩く音がしました。

『もしや娘ではないか？』

といふ考へが、同時に夫婦の胸の中を流れて行きましたが、すぐそれを打消すやうな感覚が心の中から生れて來ました。

『もし／＼甚だすみませんが、一寸起きてくださいますか……』

といふ男の聲が聞えて來ました。

『何んだ男ぢやないか。』

と感興のない聲をして親父がいひました。

『私はまた、おきよぢやないかと思ひましたよ。』

と母親はいひました。

『もし、もし、ほんの一寸でい／＼のですが起きてくださいますか……』

『何んですか？』

『私は峠を越して南部へ歸るものですが、明日彼方の茶屋から返へさせますから提灯を一つ拝借したいのですが……』

親父は一寸の間、黙つてゐたが、何う思つたものか母親に相談もしないでかう答えました。

『お生憎さまですが、提灯は皆な貸してしまつて一挺もありませんが……』

『もし／＼、それでは蠟燭を一本賣つてくださいますか、何しろ大吹雪で一寸先きも見えませぬのですから……』

『お氣毒ですが、蠟燭は皆な賣切れてしまつて、一本も店にありません……』

と親父は平氣な調子でいひました。母親はそれをきいて、『困つたことをした』とは思つたが、親父の言葉を打消してまでも提灯を貸してやる譯にはなりませんでした。

『それでは仕方がありません……』

と旅人は元氣のない聲でいつて、往來へ出て行つた容子でした。
 夫婦は何故だか物をいふのがいやになつて、それきり何もいはずに冷たい眠りに落ちてしまひました。母親はいやな夢ばかり見續けて幾度も眼を覺しました。

翌日の晝頃に雪が晴れました。

夫婦は何となく不快な心持で半日を暮してしまひました。午後になつて、峠から下りて來た馬子が、峠の上り際の澤の中に人間が二人死んでゐると教へて行きました。

村の男供は雪拂ひを肩にして峠へ行つて人の死んでゐるといふ澤の中へ下りて行つて見ました。一人は男で散々雪の中を駆け廻つた揚句に自分の着てゐた合羽を雪の上に敷いてその上に眠つたまゝ死んでゐました。一人は女で

男の死んでゐた場所から一町位離れたところにこれも安らかに眠つてゐました。然の女の兩手の爪は一本もついてゐないで爪の生際から血がにぢみ出て近所の雪を眞赤に染めてゐました。

村の男が髪を亂した女の顔を持ちあげて見て驚いて叫びました。

『これは店のおきよだ!』

村の男達は皆な女の死骸を圍んで、その顔を眺めて見ましたが、それは確かにおきよに相違ありませんでした。

村の男達から娘の死骸を受取つた時に親父は母親に向つていひました。

『もし提灯があつたら、おきよは死ななかつたのかも知れない……』

『然うね、もし提灯があつたら。』

といひかけて見たが、母親は、昨晚南部へ歸る旅人にした自分等の冷淡な態度を思ひ出して口を緘んでしまひました。

娘に死なれた後の夫婦は何うして暮して行つたか解りません。

光といふものは自分だけを照すために必要なものではありません。

鶴と蟹

昔印度の國のある野原に一つの池がありました。池には澤山の魚が住んでゐました。何萬となく色々な種類の魚が住んでゐました。池は山からあまり遠くもなく、近くもありませんでしたから、いつでも、いゝ具合に水が溜つてゐました。池の周圍には菩提樹の並木が立ち繁つてこんもりとした葉蔭を池の水に寫してゐました。

印度の國には昔から名高い哲學者が澤山ありましたが、さういふ哲學者達はむづかしい哲學を考へるためによくこの池の邊へ来て黙つて何日も坐つてゐることもありました。また音楽の盛んな國でしたから月のいゝ晩などは美しい男や女がこの池の邊へ来て面白い音楽を奏することもありました。「私達は何んで幸福者だらう！」と池の中の一匹の魚は、池の表面へ浮んで

来て、小蟲を啄ばみながら、他の魚と話しかけました。

『ほんとうに、然うだ』と他の魚は静かに尾を振りながら、『世の中に澤山の魚が生きてゐるけれども、この池にゐる者ほど幸福な魚はなからう。食べる物はふんだんにあるし、水が澤山だから、咽喉の渴くといふこともなし外海のやうに鯨や鱈に追はれるといふ心配もない。私達は毎日かうして静かに泳ぎながら餌を漁つてゐさへすればいゝんだ。』

といひながら、滑かな身體を動かして池の小波の中を他の方向へ泳いで行きました。もう一匹の魚も黙つて其後について泳いで行きました。其後には美しい水の輪が出来て、それがだん／＼擴つては音もなく消えて行つてしまひました。

小鳥が菩提樹の上で絶えず囁つてゐました。そして時々池の水を飲んだり羽を湿すために蘆の葉の蔭に下りて來たりします。すると其度に小さな鮎の

群が蘆の葉が動くので、びつくりして逃げ出して行きます、そして、もう安心だと思ふやうなところへ行くと、申し合はせたやうに口を天の方へ向けて白い泡を吹出して一休みしてゐます……

この平和な池の上にも、とう／＼大きな不幸がやつて來ました。

印度では夏季に長い間まるで雨の降らない時があります、それでも、時々大きな驟雨がやつて來るので人間も草木もすべての生物といふ生物は初めて呼吸をつくことが出來ます。然しある年の夏、大きな于魃が來ました。人々は驟雨を降らしてくださるやうに神様に御祈禱をあげましたけれども、一滴の水も天から降りて來ません。井といふ井、泉といふ泉は水を湧き出さなくなりしました。人々は渴いて死にさうになつたので、草や木の根を堀りかへして水を出さうとしましたが、出る筈がありません。お終ひには何んな泥水でも水でありさへすれば、先を争つて飲みました。

平和な池もこの大干魃にはかなひません、あれほど一杯に溢れてゐた水もだん／＼減つて行つて、とう／＼泥沼のやうになつてしまひました。今まで威勢よく泳ぎ廻つてゐた魚は身體を横にしてぬら／＼した泥の上を蛇のやうに爬つて歩かなければならぬやうになりました。魚の子供等や、小鯛は初めの内は水の多くあるところだけを選んで泳いでゐましたが、だん／＼水が減るにつれて、身體が弱つて行つて眞白な可愛い腹を向けて死ぬものも澤山に出来て来ました。

親達や少し身體の丈夫な魚達は皆な集つて相談を初めました。

「世間には随分不幸な魚共もあるといふ話は昔から聞いて知つてゐたが、それはみんな他の事で、己れ達にはまるで關係のないこと、ばかり思つてゐた。然しなかうなつた以上は何とか巧風をせざるまい。」

と一番年寄つた魚は心配さうな顔をして一同を見廻はしました。すると、一

匹の魚は、

「まつたく、何とかしなければ一同渴死にしなければならぬ。伯父さんに

何とかいゝ考へはありませんか？」

と年寄つた魚を見上げました。

「されば、私は此間から、その事で何れだけ頭を悩ましてゐるか知れないのだ：：私のやうな年寄りは何時死んでも惜くはないが、あの小さな小魚共があゝして死んで行くのを見ると、私は不憫でならない！」

と年寄つた魚は眼をうるませて語りつゞけました。

「私は何うかしてこの池を出る巧風がないかと考へてゐるのだが、何しろ私達の先祖がインドラの神様に足と羽をお返へししてからといふものは、飛ぶことも歩くことも出来ないで何うする譯にもいかない。私は昔から神様を信じてゐるから、今に何うにかなる。神様はきつと何うかしてください

るとは信じてゐるが、かうして毎日子供達の死んで行くのを見ると、かうしてはゐられないやうな氣もするが、お前達に何かいゝ考へがあるなら遠慮なく言つて見て呉れ。」

すると、一匹の若い魚は元氣のいゝ聲で、

「伯父さんのやうに、私達は神様といふやうなものを信じないんです。同じ魚の中でも羽の生へた魚もあるぢやありませんか。足の生えた魚もあるぢやありませんか？ 然し私はこんなことは何うでもいゝんです。たゞ現在の我々の運命を何うすればいゝかといふことが問題なのです。先づ我々はちつとしてこの儘死んで行くか、或はこの池からぬけ出して何處か水の澤山にある他の池を探して行くか、これは先づ第一の問題です。世間は廣いんです。こゝから五十里ばかり行くと大きな湖があるさうです。そこへ行くとみんな幸福で暮せます。私達は自分の住つてゐるところを世の中で



一番幸福なところだと思つたのは大きな誤りでした。諸君は然うは思ひま
せんか？」

と若い魚は、眼を輝かして一同を見廻はしました。すると、會議に列してあ
た多くの魚共はこの若い魚の意見に感激したやうに、尾や鰭を動かしました。
年寄つた魚は、それを見て、

『なるほど、お前の考は結構だ。』と老人らしく、落ちついた調子で、

『だが、何うして？こゝをぬけ出て行くつもりだ、それを私に話して呉れ』
といひました。

若者の魚は、老人に然ういはれると何んとも答えることが出来ませでした
そして目をぱちくりさせてゐるばかりでした。すると一匹の鰻が泥の中から
首を出して、みんなを嘲けるやうな調子で、

『昔から馬鹿な魚が陸へ上るといふちやありませんか、この暑い時に一分間

でも上つて御覧なさいすぐ子からびてみいらになつてしまふちやありませ
んか。それより、私のやうに泥の中へもぐりこんでゐるのが一番です！』
といつて、また泥の中へもぐりこんでしまひました。

鰻はいつでも利己的で、要領を得ないので、みんなに嫌はれてゐましたが
今の場合鰻に然ういはれても魚共は何とも答えることが出来ないので黙つて
ゐました。

會議は長い間續きました。が、何うしたら池をぬけ出られるかといふ大事な
問題になると、いつでも行詰つてしまひました。

ちやうど其時、池の上の方から誰か言葉をかけるものがありました。魚共
はみんな一度に顔をあげてその方を見ました。それは一羽の鶴でした。鶴は
この于魃にもかゝはらず立派な着物を着て、長い二本の足で池の汀に立つて
ゐました。

「魚さん達、諸君はこんな于魃かんぼつに小つぼけな泥沼どろぬまの中で何なにをしてゐるんだ。今いまに諸君しよくんはみんな渴かいて死しんでしまひますぞ。それより、何處どこか水みづの澤山たくさんある湖みづうみへでも行いつて呑氣のんきに暮くらしたら何どうです？」

と鷹揚おとうやうな調子てうしで言いひました。

「實じつはその事ことで、私達わたしたちは今寄合いまよりあひをしてるところですが、何どうしたらこゝを出でてその湖みづうみへ行いけるでせう？ 一つ智慧ちゐを貸かしてくださいませんか？」

と年寄としとつた魚うをは丁寧ていねいな物言ものいひをしました。すると鶴つるは高い鋭すどい聲こゑで笑わらつて、

「智慧ちゐもなにも要いりやしませんよ。私わたしはこの嘴くちばしで皆様みなさまを連つれて行いつてあげませう。」

といひました。

この話を聞きいて魚供うをどもはみんな跳とり上あつて喜よろこびました。子供こどもに死しなれた親兄おやきやう弟にいは自分じぶんの子供こどもや兄弟きやうだいが今いままで生いきてゐたら、自分達じぶんたちと一緒しよに救すくはれるのに

と、不幸ふかうな魚さかなのことなぞを思おもひ出だしました。氣きの早はやい魚うをはもう鶴つるの立たつてゐる方ほうへ進すすんで行ゆくものさへありました。

「ちよつと待まて！」と老人らうじんの魚うなはそれを止とめて、

「鶴つるさん、あなたを疑うたがふやうで悪わるうございますが、物ものはためしといひますから、私達わたしたちの内誰うちたれか一人ひとりをつれて行いつて、その湖みづうみを見みせてからまたこゝへ届とどけてくだされば、改あらためて皆みんななつれて行いつていたゞくことにしませう。」

といひました。

「お易やすい御用ごようですとも。」と鶴つるは答こたえました。

そこで、皆みなな相談さうだんの上うへ一匹ひきの鯉こひがこの冒険ぼうけんの犠牲ぎせいになることになりました。鶴つるは早速さつそく鯉こひを自分じぶんの嘴くちばしに啣くはへて高たかく飛と上あり、美うつくしい湖水こすゐの上うへをゆるやかに飛とんでまたもとの池いけのところへつれて來きました魚供うをどもはこれですつかり安心あんしんしてしまつて一匹ひきづゝ鶴つるの嘴くちばしにはさまつて湖水こすゐの方ほうへ行いくことになりました。

鶴は一匹づゝ魚を啣へて飛んで行つてはウラナといふ大きな樹の上で甘さうに食べてしまひました。

平和の池の魚は一匹もゐなくなつてしまひました。後には一匹の蟹が残つてゐるきりでした。

鶴は蟹に向つていひました。

「私はあの不幸な魚供を一匹残らずあの美しい湖水へつれて行つてやつたが君も行つたら何うです。私はつれて行つてあげませう。」

「何ういふ風にして私をつれて行くつもりですか？」

と蟹が質ねました。

「私は嘴で啣へて行かうと思ふ。」

と鶴が答えました。

「いや、それでは、私は落ちるかも知れないから、つれて行つてもらふのは

よませう。」

「大丈夫ですよ。しつかり啣へて行くから安心なさい。」

と鶴はいひました。

蟹には、鶴が魚を湖へつれて行つたといふのは、何うしても偽らしく思はれました。然し蟹はこのまゝ池にゐると死んでしまふばかりなので何うかして湖へ行きたいと思ひました。もし鶴が自分を食べやうとしたら、反對に鶴を殺してやらうと考へたので、鶴に向つていひました。

「あなたは、私をしつかり啣へて行くのはなか／＼大變です。それより私はこの両方の剪であなたの首の周圍に抱きついて行きませう。」

「よろしい。それでは然うませう。」

と鶴は答えました。鶴には蟹の企みが少しも解りませんでした。そこで蟹は両方の剪で鶴の長い首に抱きつきました。鶴と蟹は飛行機のやうに空高く飛

んで行きました。

鶴は飛行乗りの蟹に美しい湖を見せました。なるほどすぐ眼の下に水の満々と湛えた湖がありました。蟹は一分間も早くそこへ下りて行きたいと思ひました。然し鶴は一向その湖へ下りて行かうとはしません。

「もし、鶴の兄さん、湖はすぐ下ぢやありませんか、それを、あなたは何處へ行かうといふのです？」

と蟹は心配さうにききました。

「ふむ、兄さんだつて、私はお前さんの下男ぢやないよ。誰がお前の言ひなり放題になつてゐるもんかね。御覧、あれは何だと思ふ。あれは、私の食べた魚の骨だよ。馬鹿な魚共は皆な私の餌になつてしまつたんだ。さあ、今度はお前の番だよ。」

と鶴はいひました。

見るとヅラナの樹の下に、同じ池に住んでゐた魚共の死骸が山のやうに積みまれてゐました。

「あゝ可哀相に、お前達は幸福を求めてこの鶴の餌になつてしまつたのか！ よし、今、己れはお前達の復讐をしてやるから！」

と蟹は心の中でいひながら鶴に向つていひました。

「お生憎さまだが、殺されるのは己れではなくて、貴様だ。己れの兩方の剪がお前の首の兩側にあるんだ。死ぬ時は己達は一緒に死ななければならない己れはこの剪でお前の首を切ればお前はすぐに死んでしまふのだ！」

といつて、剪の先を鶴の首にたてかけました。鶴は呼吸が塞ると痛いので涙を流して、

「何うかゆるしてください。私は決してあなたを食べはしませんから。翼をつぼめて懇願しました。」

『よし、それならば生命はゆるしてやるから、あの湖へ下りるがよい。』と蟹は嚴格に命令しました。

鶴は蟹を湖水の邊へ置くために、だんく低く降りて行きました。そして蟹が湖水の汀に降り着いた時、蟹の兩方の剪が見事に鶴の首を切り落してしまひました。

蟹は長い間待ち焦れてゐた深い緑の水の中へ入つて行きました。

壓制者と犬

あるところに大變に人望のない王様がありました。人望のない王様のところへは人望のない家來が集まるもので、この悪い家來共は王様のために色々な仕事をしました。そして立派な位や勳章をもらひました。家來供は勳章や位が欲しさに絶えず他國と戦争をしました。丈夫な人間は皆な戦争にばかり出てゐるので、田や畑を耕すことも出来ません。田や畑には雑草が一杯に生繁つて土龍や鼠が散々にあばれ廻つてゐました。

女や子供等は家の主人や男供がゐないので、安心して暮して行くことが出来なればかりではなく、毎日の食物さへ碌々手に入れることが出来なくなりました。広い王様の領土中、王様を好くいふものはたゞの一人もなくなりました。王様は町を歩いて行くと、皆な道をよけて敬禮をしました。然し一人

としてほんとうに王様を尊敬して敬禮をするものはありませんでした。たゞ御辭儀をしなければ、牢へ入れられたり殺されたりするので、仕方なく敬禮するのでした。

然し王様もとうとう自分が人民に嫌はれてゐることに氣がおつきになりました。そして、名高い一人の家來をお呼びになつて申されました。

「私の領土の人民は皆な幸福で暮してゐるか何うか？」

「私の見ますところでは、陛下の人民ほど幸福な人間はまたとあるまいと存じます。」

とその家來は答えました。

王様はまたつゞけてお質ねになりました。

「私の領土の人民は私を愛してゐるだらうか？」

「無論陛下を愛して居ります。」

とまた家來は答えました。

「然し私はその證據を見たいものだ。何うしたならば、私の人民が私を愛してゐることを確かめることが出来るだらう？」

と王様はおいひになりました。

「それは誠にお易い御用でございます、明後日陛下に其證據をお眼にかけます」と家來は申上げました。

其日王様の領土の代表者が千人ばかり、色々な貢物を携へて宮殿に集りました。そしてその代表者達は貢物のほかに、王様の徳を讃へた詩や歌を王様に献上しました。その人達が歸つた後で、家來は王様に申上げました。

「今日陛下にお目通りいたしました者供は皆な陛下の御領土の町や村の代表者達ばかりであります。これほどまでに人民に愛されてゐる王様はまたと世界にはありませんまい。」

すると王様は大變な不愉快なお顔をされて、
「私の知りたいたいと思ふのは、貢物や言葉ではない、私は人民の心が見たいのだ。」

と申されました。

「人民の心と仰せになられますが、人民といふものは心を持たないものでございませぬ。陛下のお心が即ち人民の心でございませぬから。」
と家來は答えました。

然し王様は何うしても安心出来ませんでした。王様は何時、人民が謀反をして自分を殺さうとするか知れないと思ひました。王様はその頃自分の領土の周圍に敵を受けておりましたから、内も外も心配でたまりませんでした。王様はその事を考へると寝ても起きても安心が出来ません。その内に王様はとうとう病氣になつてしまひました。十二人のお醫者が宮殿につめきりで看護

申上げたけれども、王様の病氣は癒りません。王様の身體はだん／＼瘠せて行くばかりです。

その頃、何んな重い病氣でも癒すことが出来るといふ一人の僧侶が王様の御領土へやつて来ておりました。そこで、王様にその事を申上げると王様は是非その僧侶に逢ひたいとおいひになりなりました。

その僧侶は大變に名高い人でしたけれども、黒い衣を肩から斜めにかけてきりで、跣足のまゝで歩いておりました。王様の家來達は大勢行列を造つてこの僧侶をお出迎へ申しました。

王様は臥床の上に起上つて僧侶を迎へました、そしていひました。

「上人、よくおいでくださいました。上人をお迎へすることの出来たのは大變な光榮でございませぬ。」

「陛下、あなたは何をお病ひになつておいでになりますか？」

と僧侶は合掌して静かに質ねました。

「上人、私は民の心が知りたいのです。民の心は何うしたら解りませう？」
と王様はおいひになりました。

すると僧侶は、

「陛下、民の心を御自分の心の外に求めやうとなさるからいけないのです。御自分の心がほんとうに解つておいでにならないければ、何んなことをされても民の心の解る筈がございません。私は陛下にある寓話を申し上げますとつて、次ぎのやうなお話をされました。

僧侶の話

昔非常に歴制な王様があつて、人民はそのために非常に苦しみました。ある時、神様は御自分で一人の獵師の形になり、獐猛な一匹の山犬の姿になつた一人の悪魔をおつれになつて、其王様の宮殿へおいでになられました。



犬と者制歴

獵師と山犬が王様の宮殿へ入つた時、山犬は怖しい勢ひで吠えたてました。宮殿がぐらぐらと動き出すほど吠えたてました。そこで王様は早速その獵師をお呼びになつて、あの山犬が何故あのやうに吠えるのかとおききになりました。

「犬はお腹が空いてゐるからでございませう。」と獵師は答えました。

そこで、王様は山犬に食物をやるやうに命じました。犬はいくら食物をやつてもすぐに食へつくしてしまひます。宮殿で食べる晩の御馳走も、宮殿中に蓄へて置いたありとあらゆる食物もみんな食へつくしてしまひました。それでも山犬は何うしても吠えるのをやめません。王様は腹をたて、獵師にいひました。

「何うしたといふのだ、これだけ食物をやつてもやめないのは何ういふ譯だ

らう？」

「陛下、駄目でございませう。この犬の敵の肉を食へつくさない内は駄目でございませう。」

「何に、敵の肉？ この犬の敵といふのは誰のことだ？」と陛下は驚いておききになりました。

「陛下、今國內には饑餓に瀕してゐる人民が充満してゐます。さういふ人民のある間は犬は吠えやまないでございませう、そして人民の敵が陛下のお膝元に榮華に耽つて居ります。」

と獵師がいひました。

壓制な王様は自分の今迄爲した不正行爲や、自分の家來達の人民に對する態度を反省されて大變に耻しくお思ひになりました。そしてこの王様は晩年になつてから心から人民を愛し、人民からも充分に愛されるやうになりました。

た。

僧侶はこの物語をしてから王様に向つて、

『陛下よ、人間は自分の心を知るに晚いといふことはありません。自分の心が解りさへすれば、民の心が自ら解つてまゐります。』

と申しました。

王様の御病氣はだん／＼癒つて行きました。王様の御病氣が癒つて來ると多くの家來供は耻しくて宮殿の中なかにゐられなくなりしました。一人減り二人減りして、悪い家來供は一人もゐなくなつて、王様の周圍には、善良な立派な家來ばかりが残りました。

王様は幸福な生涯を終へました。

附 録

小説 三人の少女

(一)

『三人の少女は、三つの草花のやうに、世の中に生れました。』
と、ある若い青年文學者は語りました。其夜はある年の暮れに近い日で、集りのあつたのは、小石川、神田の一帶の町並みの一目に見下される、ある家の二階の一室でした。テーブルの上には白菊と水仙とをさした青磁の花罫が置いてあるきりで、青いテーブル掛も静かな落ちついた感じを與へるのでした。

……私は今この三人の少女の物語をしたいと思ひます。私はこの三人の少女のことはよく知つてゐるのですが、世間の小説家のやうに上手に話を仕組

んで皆さんにお聞かせすることが出来ないのです。またよしんば出来たとしても私のはたゞお話を面白可愛しくするのが目的ではないのです。私はこの三人の少女がどういふ風にして、この私共の生活してゐる世の中に生れて来たか、またどういふ風にして生きて行つたかといふことをお話したいと思ふのです。

三人の少女の名は三田村千代子、大澤洋子、それから相馬愛子といひました。三人とも同じ年に同じ北國の町に生れて、同じ小學校へ入学したのです。そしてこの三人の少女は學校へ入らない前から仲のいい幼な友達でしたが、學校へ入つてからは一層仲のいい友達になりました。毎日學校の往復にも三人小さな肩を並べておしやべりをしたり、笑ひ合つたりして歩いたものでした。町の人達も毎日この三人の少女の嬉しさうに並んで歩いてゐるのを見ました。

『三田村さんと大澤さんと相馬さんとは、まるで御姉妹のやうですね。』
と受持の女教師が笑つたこともありました。

三人はこんなに仲のいい友達でありましたが、三人の少女の心持はめいめに
いにまるつきり異つてゐました。心持ばかりではなく顔立も三人とも異つて
ゐれば、三人の生れた家の生活もめい々に異つてゐました。そしてこの心
持の異つてゐるのと、家庭の異つてゐるのと、毎日の爲めに、毎日逢つて話をした
り、遊んだりしてゐながら、だん／＼三人の運命がめい／＼別々な方に向い
て行つてゐるのでした。

『三田村さん！』

と洋子は、或年の天長節の朝、千代子の家の前に立つて呼びました。

『大澤さん！今直ぐよ、おはいんなさい！』

と三田村千代子は座敷の中から返事をしました。すると洋子はつか／＼と家

の中庭へ入つて来て、いつものやうに、火のどつさりおこつてゐる爐傍に元
氣よく坐りました。千代子のお母さんは洋子の顔を見て笑ひながら、

『洋ちゃんは大變お早いね。』

といふと、洋子は大人のやうな調子で、

『伯母さんお早うございます。』

とお辭儀をしました。

千代子は座敷の隅の方でお母さんに着物を着せてもらひながら、洋子の方
を見ると、洋子は美しい紫の羽織を着て黄色な大きなリボンをかけて餘念も
なく赤い爐の火を見つめてゐました。千代子はこの時自分に洋子のやうな縮
緬の美しい羽織のないのが悲しく思はれました。そして淋しい心持が胸一杯
になつたやうに思はれました。やがて着物を着更へて袴をつけて自分も洋子
の傍に坐りました。

『大澤さん、あなたのリボンはいゝことね。』
と千代子は首を曲げて洋子のリボンを賞めました。すると、洋子は、
『いゝ、あなたのリボンの方がいゝわよ。』
といひ返して、やつぱり首を曲げて千代子の髪を見るのでした。千代子はその時は紫の中に模様をついたやうなリボンをかけてゐました。千代子はそれから洋子の羽織を賞めようと思ひましたけれども、どういふ譯だかそのことだけはいふことが出来ませんでした。

(二)

千代子と洋子とは毎日かうして千代子の家に落ち合つて、愛子の来るのを待ち合はせるのでした。千代子の家は薬種と小間物を商賣にしてゐましたが、洋子の家はこの町の古い醫者でした。この二軒の家はすぐ近所にあるので、三人の少女の内で千代子と洋子の方が一層仲がよくて、愛子の方は幾ら

か縁が遠いやうな氣持がされました。千代子の二階の障子を開けると、洋子の二階の横の格子戸が見えました。そして洋子の家の鶯の聲が千代子の家に聞えて来る位でした。愛子の家はこの二人の少女の家のある町よりは少し離れた淋しい裏町でして、千代子の家は宿屋や酒屋、呉服屋や其他種々な店の並んである一番大きな通りにあつて、そこから大きな造り酒屋の土堀に添うて、淋しい町を二度ばかり曲ると行かれるのでした。

『千代子。もう學校へ行かないと遅くなるよ。』

と次の間で、お父さんと食事をしてゐたお母さんがいひました。

『お母さん、でも相馬さんがまだいらつしやらないんですもの。』
と千代子は答へました。

『さうね。相馬さんどうしたんでせうね。』
と洋子も心配さうに千代子にいひました。

「もし時間が早いと迎ひに行つてあげてもいゝんだけれど。もう遅いわね。」
 「でも、もういらつしやるわ。もう少し待つてゐませう。」

「え。」

と洋子は答へて、また千代子の傍に坐りました。

二人は温かな爐傍に坐りながら、種々な話をしてゐました。二人は菊の花で飾られた学校の式場や美しい着物を着て来る生徒の誰彼のことなどを考へると、何となく気がそわ／＼するのでした。校長先生が太い重々しい聲で勅語を讀まれることや、生徒が一同に君が代を合唱することなどを想像すると、楽しい中にも心配な心持も交つて、何度も何度も時計を見上げるのでした。

「相馬さん、ほんとうにどうしたんでせうね。」

と千代子はまた心配さうにいひました。

「さうね。御病氣ぢやないでせうか。」

と洋子がいひますと、

「いえ。だつて昨日はあんなに元氣だつたわよ。」

と千代子は打消しました。

其内にも時計は遠慮なく進んで、八時に廿分しかない時まで来ました。仕方がないので、二人は小さな胸をかきあはせて立ちあがりました。

二人は脊丈が殆んど同じ位でしたけれど、千代子の方は洋子の方よりはいくらか瘦せて見えました。寒いのと爐傍にゐたのとで頬が赤く腫れあがつたやうに見えました。よくロシアの女の頬は血のやうに赤いといひますが、かういふ寒い北國の少女の顔はやはり血のやうに赤いのです。

(三)

千代子と洋子は愛子の来るのを待ち受けたけれども、来る様子がないので、千代子のお母さんにその事を話して町へ出しました。

十一月の三日はこの土地ではきつと初雪を見るのが例です。やはり降つて来ました。軽い粉雪が斑に降つて来ました。冷い風が町を吹いて来ました。千代子と洋子は北國特有の廣い軒下を通つて學校の方へ歩いて行きました。町の四つ角から遠く雪を戴いた山脈が見えました。この山脈に雪の下りるのは町へ雪の降る一月ばかり前のことでした。千代子と洋子は白い呼吸を吐きながら、昔の士族屋敷のあつた町を通つて行きました。四方の町から、大勢の生徒達が、そろ／＼學校の方へ列をなして通つて行くところでした。

千代子と洋子を通るとみんな眼をそばだて、見るやうに思はれました。女の子供等は何か囁きあひながら二人の方を見てゐるのもあれば、馴々しく挨拶などをして一緒に歩かうとするのもありました。

然し二人は全く別な世界から來た人のやうに、さつさと道を急いで行くのでした。二人は道を急ぎながらも、愛子のことが氣になるので、女の生徒に

逢ふ度に氣を留めて見たけれども、愛子はやつぱり見えませんでした。

「相馬さんはどうしたのでせうね。」

「ほんとにどうしたんでせう。でももう學校へ行つてるかも知れないわ。」

「え、さうかも知れないわ。でも私達を待たないで一人で行くなんて随分ひどいわ。」

こんな話をしながら、二人はとうと學校の門のところまで來ました。前には緑門があつて、其緑門には黄色い菊の花で「奉祝」と書いた大きな額がかつてゐました。そして大勢の生徒達は緑門の下に立つて騒いでゐました。千代子と洋子は、この緑門を見た時何だか心持がはつきりして來て、そして急にあらたまるやうに感ぜられました。

「あら、いゝわね。」

といつて、洋子は門の前に立ち止つて門を見上げました。

「まあ！よく出来たこと。」
と千代子もそこに一寸立止まりました。

然し二人はそこに長く立止つてゐることは出来ませんでした。なせといふに、男の生徒達が二人のそこにあるのを見て冷笑したり、悪口をいつたりしたからです。千代子はその時急にいやな冷たい心持になつたのを自分で感じました。そして早くそこから行つてしまひたいと思ひながら、洋子よりも二足三足早く學校の正門の中に入つてしまひました。然し洋子の方は、男の生徒に笑はれたり冷笑されたりしながら、平氣で自分でも笑ひながら二三分間そこに立つて見てゐました。その時、千代子は耻しいやうな腹立たしいやうな氣持になつて、さつさと一人で校庭の中を歩いて行きました。

「三田村さん！」

といつて、その時洋子も急いで千代子の後を追つかけて來ました。

二人は暫く物をいひませんでした。
やがて鐘が鳴つて全校の生徒は二階の式場集りました。勅語奉讀も済み、君が代の三唱も終へました。そして例年の通り七つのお饅頭が白い紙に包まれて生徒の手に渡されました。紫や赤の袴を穿いた女生徒の列は西の階段を下りて出て行きました。

「相馬さんはどうして缺席したのでせうね。」
と千代子は洋子に囁きました。

(四)

三田村千代子と大澤洋子の二人は、天長節の式場で親友の相馬愛子の顔を見ることの出来なかつたのが不思議で不思議でなりませんでした。

愛子は千代子や洋子ほどに美しくはなかつたけれども、顔に緊りがあつて、それでゐた大變に愛嬌のある顔でした。

「相馬さんは男の子のやうな顔ね。」

と千代子がいつか洋子にいつたことがあつたが、ほんたうに愛子は可愛い無邪氣な男の子を思ひ出させるやうな顔立でした。

「きつと御病氣なのよ、さうにちがひないわ。」

二人はかう極めて學校を出ました。天長節の式の終へたのは十時過ぎでした。二人の歸る頃には雪も晴れて、寒さも幾らかゆるんだやうに思はれました。二人の心持も式が終へたのでゆつくりしたやうに思はれました。二人は今朝通つた士族町をまた歩いて來ました。町へ買物に來た田舎の人達で鮭や鱈を下げて、大變に高い調子で物をいつたり笑つたりしながら幾組も幾組も歩いてゐました。

二人はこの町の名物になつてゐる、美しい小川の傍を通つて到頭千代子の家の前まで來ました。

「さやうなら！」

「さやうなら！」

と二人はやさしい細い聲で挨拶をして別れました。千代子も洋子もこの時は、少しの間愛子のことを忘れてゐるやうでした。

「お母さん只今！」

といつて千代子が座敷へ上つて母に挨拶をすると、そこに仕事をしてゐた母は直ぐに顔を上げて、

「お歸んなさい、先刻相馬さんが見えて、手紙を置いていらしたよ。」
といひました。

千代子はお母さんに、さういはれた瞬間に胸の鼓動が急に烈しくなつたやうに感じました。さうして何か怖しいことでも出來たのではないかと思ひました。然し千代子はお母さんに心配さうな風を見せたくないと思つたので、

無理に平氣な容子をしながら、

「相馬さんがいらしたの、お母さん？」

と問ひ返へしました。

「あゝ、そしてお前に渡してくれつて手紙を置いていらしたよ。」

「さう？ お母さん、その手紙は何處にあつて？」

「二階のお前の机の上へ載せて置きました。」

と母は答へました。

千代子は「さう？」といひながら、急いで袴を脱いで表二階の自分の室へ行つて見ました。見ると、机の上に細長い古びたやうな状袋に、

私の最も愛する千代子の君に――

不幸なる愛子より。

と書いてありました。「不幸なる愛子より」……あゝ何が不幸なのであらう。

さういふ言葉はこれまで一度も愛子によつて用ひられたことはなかつた。それが今は特に「不幸なる」と書いてある。一體どんな不幸が愛子の身の上につたのであらう。

千代子は状袋の封を切りながらも、胸の鼓動が烈しく打つてゐました。中の紙は状袋のやうには古くはありませんでした。青い筋の引いたレター、ペーパーで董色のあまりよくないインキで細かく細かく文字が書いてありました。

(五)

……なつかしき、なつかしき千代子様、どんなに吃驚なすつたでせう、そしてきつと貴女がたは私のことを御心配なすつてくださったことと思ひます。私は何事も自分一人のことと諦めて、お打明けしまいかとも考へましたの。でもそれではあなた方の日頃の友情を無にすることになりますこと

と思ひましたので、涙のうちにこの手紙を書きました。私はこれまで七八年の間、ほんたうの姉妹にも増してあなた方の御親切を受けました。けれども私はほんたうにいへば、あなた方とはどうしても一緒に仲間の出来る資格のない女ですの。然し私はさういふことを考へたり書いたりするのが大變にいやなのです。あなた方は私の家の事や、私の父の生活を御存じになつたらきつと私といふものもいやになつてしまふにちがひないと思ひますわ。私達親子は今どういふ暮しをしてゐるか、お話ししてもあなた方には多分お考へになれないと思ひますの。ですけれどもたゞ、私は、千代子さんあなたにだけは何でも打ち明けられるやうな氣がしますの。そしてあなたはこの手紙をお読みになつてどんな感じをお持つになつても、私には少しの不平もありませんの。たとへ私といふものに愛憎が盡きて私をすてゝくだすつても私は少しもあなたをお怨みする心にはなれま

せん……
こゝまで讀んだ時、千代子はたゞ何となく涙の出るのがわかりました。室の中にはお母さんの起して置いて下すつた火鉢の火が温かになつて、眞赤なおきの間から青い焰がぼつぼつと音をたてゝのぼつてゐましたそして、千代子の片頬が火を受けて赤く輝いてゐました。

……私は今日の天長節を樂みにして待つてゐたのでした。私はいつものやうにあなたのお宅へ行つて、あの温かい圍爐裡の傍に坐つて、あなたのお支度の出来る間洋子さんとお話するのをどんなに樂みにしてゐたでせう……もう時は過ぎました。私は今この手紙を書きながらも學校の式場の様を考へてゐます……もう九時過ぎです……あなた方はもう列を造つてあの二階の式場に集つて君が代を歌つていらつしやる頃でせう……千代子は無言のまゝ、董色のインキの跡を追うて行きました。泣いて書いた

爲めか、所々に文字の分崩りしないところがありました。

：私は今朝六時頃に目を覚ました。そして臥床の中で今朝の天長節のことを考へると、楽しくて楽しくてたまりませんでしたの：然し千代子さん、私はその時急にいやな聲を聞いたのです：どんな聲を聞いたとお思ひなすつて？多分あなた方には私のこの心持はお解りにならないと思ひます：ほんたうに、解らないのがあたりまへです：私は何といふ不幸な女でせう：千代子さん、でも、私はあなたの事を考へるとあなたに對しては打ち明けることが出来るやうにも思ひますの、私は何もかもいつてしまひますわ：あなた方は朝起きてお父さんの聲を聞くとどんな心持がするでせう。きつとなつかしい嬉しい氣持がすると思ひますわ。またそれがほんたうなのよでも私はお父さんの聲を聞くといやな暗い氣持になりますの：父は酔つてゐましたの。そして私が目を覚ました時に父と母

は何か口論をしてゐましたの：千代子さん、私が自分のお父さんの悪口をいふのをおさげすみなさるでせう。でも私はあなたにだけは物を隠して置きたくないと思ひますから、どうぞゆるしてくださいな。父と母は爐のある茶の間にゐたやうでしたの。私はいやな暗い氣持になりながらちつと耳をすまして父と母のいふことを聞いてゐましたの。私は自分の兩親の喧嘩をちつとして聞いてゐられる位いやな濁つた女ですの。私の家では父と母の喧嘩は少しも珍しくないんですの：私はずつとして聞いてゐると、父と母は私の事に就いて口論してゐるやうでした。父は三日ばかり前から近所の家へ遊びに行つて今朝の曉方に突然歸つて來たのです。：そして母が、私の晴衣を藏つて置く箆筒を開けて見ると、私の晴衣もお母さんのいゝ着物も一枚もなくなつてゐたんです：私には母の泣聲がはつきり聞えるのです：。

千代子は読んで行く間に、だん／＼に重苦しい心になつて來ました。然し其手紙の中に愛子といふ人の境遇や、その人の氣質がはつきり現はれてゐるのを感じました。そして却つて愛子を尊敬するやうな心持になりました。

：：然し私は父も可哀相だと思ひますの：：私の父は私のもつと子供の頃は溫和しい人間で、私のことも大變に可愛がつてくれたのです：：

とも書いてありました。

千代子はだん／＼読んで行く内に愛子の生活がたまらなく可哀相になつて來ました。愛子の手紙によると、この出來事から愛子を學校から下げて、奉公にやるといふことが、兩親の間に決定つたらしいといふことでありました。一體愛子には一人の姉がありました。愛子の八歳の年にこゝから九里ばかり離れた大きな港に奉公にやられたのださうです。

私は明日から學校へ行かれても、それはこの冬きり、春にはあなた

方と御一緒にあのなつかしい學校にゐられなくなるかも知れません：：とも書いてありました。

千代子は愛子の手紙を讀んでしまつた時、どうかして、愛子を今の身上から救ひ出してあげたいと思ひました。そして自分でこの手紙を持つて、愛子の家を訪ねて、愛子の兩親に逢つて、愛子を奉公にやらないやうに願ひしようかとも思ひました——然しそれはとても出來ないことだと思つたら、急に悲しくなつて涙が頬を傳つて來るのでした。

(六)

千代子は晝の御飯を食べながらも、絶えず愛子のことばかり考へてゐました。平生は御飯の時よくお喋りをする千代子が今日に限つて何もいはずに黙つて、時々深い嘆息をするので、お母さんも不思議に思ひました。

「千代子はどうかしたの？」

「いえ。」

「でも、何だか元気がないぢやないか。」

「何でもないのでお母さん。」

と無理にお母さんの方を見て笑ひました。

食事がすんでから千代子は愛子の手紙を持って、洋子を訪ねるために家を出ました。小川の橋を渡つて少し行くと、そこがすぐに洋子の家でした。千代子は洋子の家の門を入ると、玄關の横手に醫者の乗る櫓がありました。この邊では冬になると車が通はなくなるので、人車の代りに箱櫓といふ一種の櫓を用ゐるのです。お醫者は大抵この櫓に乗つて病家を訪ねるのです。

「大澤さん。」

と千代子が呼ぶと、洋子は奥の座敷から飛んで出て来ました。表座敷の隅に小さな子猫が背中を圓めて温つてゐるばかりで、他には誰もゐませんでした。

「大澤さん、上つてもいいこと？」

と聞きますと、洋子はすぐに頷いて千代子を自分の小さい部屋につれて行きました。この部屋は洋子の兄さんが中學にゐた頃使つた部屋でした。庭に向いた六疊の間で、床の間には兄さん達が中學にゐた頃寫した大きな寫真などがありました。兄さんは、一番の兄さんが亡くなる前に寫眞を研究してゐたので、その撮つた寫眞なども、澤山にありました。

洋子は小さな火鉢に火を起して持つて来ました。二人にいつものやうに火鉢を間にして坐りました。

「もう、御飯すんで？」

と千代子がきくと、

「えい、とうによ。」

と洋子は答へました。

千代子は愛子のことをどういふ風に話さうかと考へましたが、種々考へた末に何にもいはずに愛子の手紙を洋子に渡しました。

『なあに?』といひながら、洋子は愛子の手紙を受取りました。そして無頓着に上書を見ましたが、すぐに、

『おや、相馬さんの手紙なのね。』と叫びました。

『え、読んで御覧なさい。』

『あなたは、もう読んでしまつて?』

『え、私はもう読んでしまつたの。』

洋子は愛子の手紙を読み初めました。時々洋子は手紙を下に置いて深い嘆息を洩しました。そして皆読んでしまつた時には元氣の洋子も涙を流してゐました。

『私は相馬さんのことで、あなたに相談に來たのよ。』と千代子はいひました。

『一體どうしたらいいでせうね。あなたはどうか考へて?』と洋子は百代子に問ひ返へしました。

『私もどうしようかと考へてゐるところなの。私は初め、相馬さんのお家へ行つて愛子さんを退學させないやうに願ひしようと思つたんですけど、それは駄目だわね、洋子さん。』

『え、それは駄目よ。』

『そんならどうしたらいいでせうね。』

『ほんとうにどうしたらいいでせう。』

と二人は大人でもするやうに首を曲げて思案に暮れてゐました。暫くして千代子は何かを考へつゝいたやうに目を輝かして洋子の方を見ました。

「何か考へついて？」

「え、いゝことを考へたの。きつと、これは成功すると思ふわ。」

と千代子はいひました。洋子も嬉しうに目を輝かして千代子の顔を見ました。

「一體どんなことなの？ どんなことを考へついたので？」

「あのね、先生にこのことを打明けて先生から愛子さんのお父さんに話してもらつたらいゝと思ふわ。え、私きつと出来ると思ふわ。」

「ア、それがいゝわ！ ほんたうにいゝことを考へたわね。」
と洋子はさも嬉しうに手をたゝきました。

「だけでも、先生つてどの先生にお話しするつもりなの？」

「無論、大村先生によ。」

と千代子は答へました。

大村先生はこの三人の少女の受持の教師で、同じ級の内でも、この三人の少女を一番愛してゐたのでした。そしてこの三人の少女はこの級の誇りでもあつたし、全校の模範生でもありました。千代子と洋子は大村先生のことを考へた時に、ほつと重荷を下ろしたやうに感じました。

(七)

大村先生はこの町から三里ばかり離れた大きな町の生れで、三年ばかり前からこの學校に奉職するやうになつた人でした。教師としては大した経験のある人ではなかつたが、比較的新しい師範出の人であるだけに教育の仕方にかんがふところがありました。またこの人は文學が好きで、師範學校にゐる頃から和歌などを作つて東京の雑誌などに投書したりして居りました。

大村先生は天長節の晩に自分の部屋で讀書してゐました。彼は東京で新し

く出版された哲學書の翻譯を読みかけてゐたところでした。そこへ下宿の女中が急に障子を開けて入つて來ました。

『大村さん、お客様。』

と女中がいひました。

大村先生は本から目を離して、

『お客様つて、誰？』

『學校の生徒さんです。』

と女中は答へて、さつさと出て行きました。

大村先生は學校の生徒に訪ねられたことがあまりないので、不思議に思ひながら、部屋の前のスリッパをつゝかけて二階の階段を下りて、入口のところへ行つて見ると、そこに自分の受持の生徒が二人ぼんやり立つてゐました。

『やあ、三田村さんに大澤さん！』

といつて大村先生は嬉しうに言葉をかけました。

『先生、今晚は。』

と千代子と洋子は改めてお辭儀をしました。二人の心も何となく嬉しさを感じました。

『先生、先生に一寸お願ひがあつて參りました。』

と千代子は元氣を出していひました。それでも何だかはつきり物をいへないやうに思はれました。

『さうですか。まあお入んなさい。』

『たゞ一寸お話ししたいことがございまして。』

と千代子は同じことを繰り返してどぎまぎしてゐました。

『まあ兎に角お入んなさい、そこは寒いから。』

といつて、大村先生は自分で先きに立つて二階の階段を登りかけました。千

代子と洋子も先生の後について上つて行きました。千代子にも洋子にも下宿といふものが初めてなので、廊下を歩きながら何だか不思議なところのやうに思はれました。

第九號といふ札のかゝつてある部屋の前に大村先生が立つてゐました。二人は一寸會釋して部屋の中へ入りました。

「よく来てくれましたね。一體どんな用ですか。」

と大村先生はお菓子をお二人にすゝめながら聞きました。

「先生！」と千代子は言ひ出すには言ひ出したけれども、出来事が幾らか複雑なので、言ひ盡つてゐると、洋子は快活に、

「先生、相馬さんが學校を廢めるのを御存じですか？」

と言ひました。

「いゝえ！ 私はちつとも知らない、誰がそんなことを言ひました？」

と大村先生は問ひ返しました。

「でも、先生、今日相馬さんは學校へいらつしやらなかつでせう。」
とまた洋子がいふと、

「え、それは私も知つてゐたけれども、學校を廢めるといふことは知らない。」

その時。千代子は懷の中から愛子の手紙を出して、先生の前へ置きました。すると先生は何にもいはずにその手紙を取り上げて、ランプの方へ身體を向けて熱心に讀んでゐましたが、その間二人は呼吸の塞るやうな心持で先生の方を見てゐました。

十分ばかり経つて先生は深い嘆息をして二人の方へ向き直りました。

「なるほど、よく解りました。」

と大村先生は靜かに言つて、

『して、あなた方はどうしようといふのですか？』
と問ひ返へしました。

『先生！一體どうしたらいいもんでせう？』

と千代子は元氣を出して投げ出すやうにいふと、大村先生は、

『いや、そんなに御心配なさらんでもいいでせう。相馬さんのことは私が引き受けました。』

と大變に落ちついた調子で言ひました。

『でも先生、相馬さんが學校を廢めると、ほんとにつまらないんですから、よく相馬さんのお父さんやお母さんにお話くだすつて、學校へ來られるやうにしていたゞきたいんですの。』

と洋子がいふと、千代子も一緒に頭を下げました。

『相馬さんはよく出来る人です。あゝいふ人を廢めさせるのは學校でも大變

な損ですから、私は今晚にも行つて、お父さんにお願ひして見ませう。もしそれでも聞かれなかつたら、私の方で月謝位は引き受けてもよろしい。決して心配してはいけません。』

と先生が若々しい顔に決心を示して言ひました。

二人は胸が迫つて來て、嬉し涙が目に一杯になりました。

(八)

十五の春が來ました。今三人の少女は八年間毎日々々通つた懐しい母校の門を出なければならぬことになりました。三人の内の相馬愛子はもう少いで、港にやられた上の姉さんと同じ運命に陥らうとしたところを、大村先生から月々の月謝を補助されて、満足に高等科を終へることが出來ました。

三人の少女として學校生活をつゞけた彼等は、また三人の少女として新しい生活をつゞけることになりました。

卒業式の日には温かい、いゝお天気でした。三人の少女は聲を合はせて「螢の光」を合唱しました。歌つてゐると、我知らず涙が出て来るやうに思はれました。遠い山にはまだ雪が澤山に残つてゐて、それが日を受けて光つてゐました。校門の大きな日章旗が時々音をたて、風にひらめいてゐました。

三人は卒業證書と共に優等賞をも貰ひました。卒業の時の順番は愛子が二番で千代子が三番で、洋子が四番でした。然しこの三人の成績は殆んど差違がないほどでした。一番になつた子は學科はよく出来ましたが、三人の少女よりも實際の頭脳は劣つてゐるといふことでした。

三人は今卒業證書を貰つて家へ歸らうとすると、階段を下りて来て、教員室へ入らうとする大村先生に逢ひました。それを見ると三人は丁寧にお辭儀をしました。

「先生、さやうなら！」

「ちよつと。待つてください！」

と大村先生は、三人を呼び留めました。三人は下駄箱の傍へ下りようとする處に立つてゐると、先生は一寸教員室へ入つて、またすぐに出て來ました。

「ちよつと、此方へ來てください。」

といひながら、三人を教員室の隣の應接室へ案内しました。大村先生は大きな萬國地圖のかゝつた壁を背にしてにこゝして三人を見ました。三人もまた嬉しさに先生の顔を見上げました。

「とうと、皆さんも卒業して、先生は淋しくなつて困るね！」

と戲談のやうにいひましたが、先生の顔には何處やらほんとうに淋しい心持が表はれてゐました。

先生は三人の顔を見ながら、種々なことを話してくれました。

「皆さんは學校を出てから、どうするつもりですか？それを先生に話してく

「れませんか？」

と先生はいひました。

三人は耻しさうにして何もいひませんでした。

「三田村さんは、やつぱり東京の兄さんのところへ行きますか？」

と先生は千代子に聞くと、千代子は、

「え、行きたいと思つて居ります。兄が女子大学の女学校へ入れたいといつて来ましたから。」と答へました。

「然うですか？いつ？」

「この月の末に行きたいと思ひます。」

「さう、それは大變急ですね。私はあなたの兄さんにはお目にかかつたことはないが、手紙はちよいといたゞきました。あなたは東京へ行けていね！」

と、子供らしい顔をして羨ましさうにいひました。千代子の兄はこの学校の卒業生で、今は東京で文學や美術を研究してゐるのでした。大村先生は文學や哲學が好きで始終書いたものを千代子の兄のところへ送つて、批評してもらつたりしてゐるのでした。それで先生は時々学校の往復に考へた和歌などを千代子にくれたこともありました。

「三田村さん、何處へ行つても手紙を下さい。私も來年になると東京へ行くつもりです。」

「え。」

と千代子は嬉しげに眼を輝かして答へました。

「大澤さんは？」

「私は何うなりますか解らないんです先生、兄さんは軍隊に入りましたから。」

「然うですか？ 大澤君は軍隊に入りましたか？ なせ開業なさらないんで

せう？」

洋子は笑ひながら、

「兄さんは町で醫者をするのがいやなんですつて。」

と答へました。先生も笑ひました。

最後に大村先生は愛子に對つて、

「相馬さんは是非港の女子師範へお入りなさい。この間、ちよつとお父さんにも其事をお話して置きましたが、あなたならきつと及第しますよ。」

といひました。その時愛子は、決心のある調子で、

「先生、私は先生の御恩は一生忘れません！ 私はきつと成功してお目に

かけます。」

といひました。

それから、三人は先生に別れを告げて室を出ました。三人は下駄を穿いてお庭に出て、もう一遍懐しい學校の方を見ると、大村先生はいつまでも、玄關のところに立つて三人を見送つてゐました。

(九)

學校を出た三人は餘り嬉しいので、其儘家へ歸るのが惜しくて、色々話をしながら昔お城のあつた高臺に出ました。野原にはところどころ雪がありましたが、もう河の水が來て、日光を受けた瀬の水が白く光つてゐました。そして城趾には若草が芽を出してゐました。

岩木山といふ富士の形をした山が、その河の水の流れて行く方に、高く厳しく立つてゐました。眞白い頂が幾らか曇つてゐましたが、裾の方は日光に照されて、青味を帯びて輝いてゐました。三人は今まで殆んど毎日のやうにこの城趾へ來て見ましたけれど、今日ほど楽しい心持で眺められたことはあ

りませんでした。

『まあ、奇麗なこと、まるで煙つてゐるやうね!』

と千代子は遠い町の方を見ていひました。そこから三里ばかり離れたHといふ大きな町の屋根が霧のやうなものに包まれて見えるのでした。

『あすこはHの町でせう?』

と愛子がいふと、

『え、あれはきつと師團でせう。あすこに家の兄さんがゐるのよ。』

と洋子はいひました。

『然うね。』

と千代子もいひながら、三人肩を並べて、廣い遠い野原を見渡しました。三人は卒業證書を美しい着物の袂の先きから出しながら楽しさうに話して歩きました。高臺の上には雪がないので草が乾いてゐました。三人は今度は町へ

上つて行く大きな坂の見える方へ腰をかけました。

『あなた方はいゝわね?』

と洋子は突然、何を思ひ出したか、二人にいひかけました。

『どうして?』と千代子はいひました。

『すぐ學校へ行けるから羨しいわ!』

『だつて、あなただつて、行けるぢやないの?』

『いえ、駄目なのよ。』と洋子はつまらなさうにいひました。

『なぜ?』

『兄さんが家へ歸らない内は私を出してくれないんですもの、私ほんとにつ

まらないわ。』

と洋子は悲しさうにいひました。

『でも、あなたはいつまでもお父さんやお母さんと一緒にゐられるからいゝ

わ！ それに私達の好きな大村先生にだって、逢へるからいゝぢやないの？」

と愛子もいひました。

「だって、大村先生は來年になると、東京へいらつしやるつておつしやつたわよ。そして見ると三田村さん一番いゝのよ！」

と、千代子にからかふやうにいひました。

「大村先生、ほんとうに東京へいらつしやるかしら？」

と千代子は誰に尋ねるともなくいひました。

「ほんとうに、いらつしやるでせう、さつき先生さうおつしやつたから。」

と愛子は、洋子よりは幾らか眞面目な調子でいひました。

千代子には大村先生のこと何となく氣になり初めました。大村先生が東京へ行かれるといつたが、何のために行かれるのだらう？ またもし東京で

お目にかゝつた時には大村先生はどんな容子をしてゐられるだらう？ といふやうな事を取り止めもなく考へてゐました。千代子はいつか先生が、私は今學校の教師をしてゐますが、私には教師といふ仕事に向かないんです。私は皆さんを教へてゐながら、一度も自分が教師だと思つたことはありませんといつたのを記憶してゐました。千代子はその言葉を思ひ出した時に、大村先生のことが一層氣になりました……。

三人はやがて、城趾を出て、町の方へ歩いて行きました。

(十)

三田村千代子は今東京の郊外にある兄の家に寄宿して、そこから麴町の女學校に通つてゐます。

千代子の目の前には、幾らか広い世界が開けて來ました。兄の家は淋しい森の近くにあつたけれどもそれでも、田舎の小城下の生活よりは何となく明

るく華やかでありました。兄の家から四五丁も出ると可なり賑やかな町があつて、そこには活動寫真や小さな劇場までありました。千代子は夕方兄嫁と一緒に買物に出る時など、いつでも田舎の淋しい町や、自分の生れた家、その中に住つてゐられる両親、それよりも先づその懐しい二人の友達のことには思ひを走せました。

大澤洋子からの音信によると、相馬愛子は女子師範學校の入学試験に首席で及第したといふことでありました。然し、洋子自身はあまり幸福な生活を

してゐないといふことでありました。

千代子には洋子は子供の頃には一番幸福で暮しさうに思はれたのです。で「大澤さんはどうしてさう不幸なのだらう？」と心の中でいひながら、自分の友達を心から憐れみました。洋子は父の望みによつてある町の青年と結婚したけれども、どうしても、その青年を愛することが出来なかつた。そしてと

うとその年の暮にその人と離婚してしまひました。そして今郷里の裁縫學校で裁縫の手傳ひをしてゐるといふことでした。

千代子には、この二人の友達のことを思ふ度に氣にかゝるのは、三人の少女を愛し、三人の少女を教へてくれた教師の大村でありました。大村先生と千代子は、上京後四五遍手紙の往復をしました。其度に大村先生は親切な手紙をくれました。其手紙は皆千代子を激ましてくれるやうな性質のものでした。

ある時千代子の兄は二階の書齋から千代子と呼びました。千代子は兄に呼ばれて二階へ行きました。兄はいつになく眞面目の厳格な顔をしてゐました。千代子はそれを見ると、何となく怖いやうな氣がしました。

『千代子！』

と兄は言葉の調子を強めていひました。千代子はなるたり平氣な心で兄に對

しようと思ひましたから、少し笑ひながら、

「兄さん、なあに？」と聞きました。

「大澤といふ先生から時々手紙が来るやうだがどんなことをいつて来るんだい？」

「え、来てよ。あの先生には大變にお世話になつたの。ですから私の方でも始終手紙を差上げるのよ。」

「手紙をやるのは無論いゝけれども、餘り度々手紙をあげるのは却つて失禮ぢやないか？そのためにあの人が迷惑を蒙るやうなことがあつてもいけなしし。一體あの大村といふ人はどんな人？」

「兄は何か意味ありさうな容子で、千代子の顔を見るのでした。然し千代子の胸には少しも濁つたものがなかつたのです。」

「大村先生のことは兄さんだつて御存じぢやありませんか。始終文章なぞを

直してあげたんですもの！」

と不平らしくいふと。

「文章を直したつて、やつぱり人間のほんたうのことは解るもんぢやないよ。人間といふものは長い間交際してゐても中々その人の心持といふものが解るもんぢやない。」

と兄は意地の悪い言ひ方をしました。

「大村先生は兄さんの書いたものが大變好きで、始終讀んでいらつしやるのよ。」

と千代子は大村を辯護する様な調子でいひました。

「よく誰でも、そんな事をいふもんだよ。僕の書いたものなんかをほんたうに讀んでくれてゐる人は極く少いんだよ。それでも逢へばみんな、そんな事をいふもんだ。あの大村君といふ人は、幾歳位になる人だい？」

「さあ、お幾つでせう？」

と千代子は困つたやうに首を曲げました。實際千代子には自分の先生の年が判らなかつたのです。千代子には先生は年老つた人のやうにも思はれるし、また大變若い人のやうにも思はれました。

「一體どんな事をいつて来るの？ 僕にあの先生の手紙を見せてくれないか？」

「大村先生の手紙？」と千代子は兄の言葉に對して幾らか反抗するやうに、

「え、見せて上げてでもいいわ。ですけれど兄さん、今日に限つてどうしてもんな事を仰しやるの？」

と、うらめしさうに兄の顔を見上げました。

「千代子、お前は誤解してはいけないよ。私はお前を疑つたり、責めたりするんぢやない、たゞお前の心持を聞いて見たのだ。實はね、大村といふ人

から、僕宛に手紙が來てゐるんだ。」

と兄はいつて、ちよつと口を緘みました。

「兄さん、大村先生から。」

「あ。昨日來たんだが、今朝お前に言はうと思つたけれども、學校へ行く前に心配させちやいけないと思つて何もいはなかつたんだ。」

千代子は、かう兄にいはれて益々心配になつて來ました。

「一體兄さん、どういふ事なんですの？ 大村先生はどうかなすつたのですか？」

「この手紙によると、大村といふ人は學校をやめたらしい。お前のところへは何ともいつて來なかつたかい！」

「まあ！ 兄さん、それは眞實でせうか？ どうして大村先生が學校をやめたんでせう？」

兄はなるたけ妹に心配をかけまいとしてゐるやうに、態と無頓着な調子で言葉が続けました。

「實に馬鹿げた話さ！つまり大村といふ人がお前と手紙の往復してゐるのを誰か中傷して言ひ觸らして歩いたものらしいんだね。それで校長も非常に困つてゐるのを、あの人は氣の毒に思ひ、かねての希望でもあるところから、この機會に教育界を退かうといふのさ。」

千代子は兄の言葉を聞いてゐる内に何とも言へない悲しみを味ひました。然しその感情の底には生れて初めて味つた世の中の醜さがありました。そして千代子は今は泣いてゐる時でないといふ強い反抗心さへ生れて來るのを覺えました。兄はまた言葉を續けました。

「然し僕は今お前を責めようとは思はない。また大村といふ人の心持も僕には能く解る。あの人はこの手紙の中で、自分がかういふ事になつたのは自

分の徳の足りない處から來たので、それに就いて誰も怨んではゐない。たゞこんな事のために前途のあるお前の生涯を誤らないやうにとくれくも書いてゐる。あの人の性格などもこの一本の手紙で殆んど盡きてゐるやうだ。私はあの人を信じてゐる。」

兄のこの言葉を聞いた時千代子はもう堪らなくなつて、兄の傍に泣き倒れてしまひました。

「兄さん、私達を信じてください！」

「あゝ、信じてゐるとも！なにも泣くには當らない。私達は今泣いてゐる時ぢやない。私はお前の兄として、大村君に對して、何だか責任があるやうな氣がするんだ。」

と兄は決心のある調子でいひました。

「兄さん、一體どうしたらいいでせうね？大村先生は學校をやめてどうなさ

るつもりなんでせう？」

「この手紙では、大村君は広い世間へ出て自分を教育して見たいと言つてゐる。或はあの人は普通の先生のやうに、教室の中で生徒を教へる人ではないかも知れない。大村君のやうな人は人に物を教へるよりも一生苦んで自分を創造つて行く人かも知れないね。」

と兄は獨語のやうに言つたが尙ほ言葉を續けて、

「僕は大村君に東京へ来るやうに言つてやらうと思ふがどうだらう？」

「でも東京へいらしつて何をなさるんでせう？」

「何でもするさ。もしあの人がほんたうに藝術家の生活が好きならば、創作をしてもいいし、或は雑誌か新聞へ入つてもいいし。」

「眞實にそれが出来たらどんなにいいでせうね！」
と妹はさも嬉しさうにいひました。

其年の秋大村先生は五年ばかり住み慣れた縣の教育界をすて、東京へやつて來ました。彼は上京後すぐに三田村の家を訪ねて、千代子にも千代子の兄にも逢ひました。千代子の兄は大村のために生活の口を探してやらうとしました。大村は、斷然それを斷つて、英語専門の學校へ入學しました。大村は六年振りてまた若々しい學生の生活に歸りました。

(十一)

千代子は兄の家にもう滿三年ほど暮しました。ある夏の初めに千代子は一人で日比谷の方へ散歩に行きました。其頃は梅雨季を過ぎた時で、人々は新しい浴衣を着て、散歩を楽しんでました。千代子はわざと神田橋で電車を下りて、大きな官省のある広い町を歩いて濠端に出ようと思いました。ちやうどそこに撒水車が一臺あつて柳の枝が青々として垂れてゐました。涼しい風が

濠の上を流れて行きます。

千代子は袂からハンケチを出して顔を拭いてみると、突然後から聲をかける人がありました。

「三田村さん！」

といふ聲が顔を見ない時から、非常に親しみのある人だといふことを思はせました。千代子は振返へつて見ると、それは大村先生でした。

「あら、先生暫くでございました！」

といひながら、大村の姿を見ると、いつもの先生らしい容子とはすつかり異つて、まるつきり神田あたりで見かける学生のやうな風をして居りました。

「見さんは御丈夫ですか？」

「え、丈夫でございます。」

「それは結構。あなたは今日は何處へいらつしやるんです？」

と大村は繁つた柳の木の下に立つて、なつかしげに千代子を見ました。

「今日は土曜日ですので、日比谷へ散歩に参らうと思ひまして。」

「さう、それはよかつた。私も何處といふ當もなく歩いてゐるところです。一緒に行きませう。」

「え。どうぞ。」

と千代子は嬉しげにいつて、大村と一緒に歩きました。

その頃は神田あたりの学校のひける時なので、道には大勢の學生が列をなして歩いてゐました。千代子は其中に混つて行くのが、何となく恥しいやうな心持がして、俯き勝ちに歩いてゐました。

「三田村さん、僕もとうとうまた學生になつてしまひました。」

と大村は笑ひながらいふと、

「先生、ほんたうですわね。」

と千代子も笑ひながらいひました。

「私はあなたを教へたことがあるけれども、やつぱり先生の資格はなかつたんですね。私はあなたと同じ學生になりました。だから私達は先生と生徒ではなくて、同じ學生同志です。これから私を先生といふのだけは止してください。」

と大村がいひました。

「まあ！先生、勿體ないこと、先生はいつまで経つても先生ですわ！」

と千代子は大村から少し離れるやうにしていひました。二人はまた無言のまゝ公園の中へ入つて行きました。三色堇の花壇が幾筋もくもあつて、青い芝草は煙つてゐるやうに萌え出てゐました。

二人は公園の中へ入つてから。なるだけ静かなところだけをを選んで歩きました。電車の音も聞えないやうな奥の方の芝草の上に二人は腰を下しました。

静かですね！」

と大村は疲れたやうな聲でいひました。然しその聲の底には三年前のやさしい調子が籠つてゐました。

「え、ほんたうに静かでございますこと。」

と千代子は大村の方を見ずに答ました。

大村は上京後、千代子の兄が熱心にお世話しようといふのも聞かずに、全く獨立して學校生活をしてゐました。千代子は大村に逢つた瞬間には、言ひたいことが澤山あるやうな氣がしましたが、斯うして肩を並べて坐つてゐると何も話すことが出来ないやうに思はれて、それが千代子には不思議に思はれるのでした。

暫くあつて大村は、

「三田村さん、僕はいつかあなたに逢つてお詫びしたいと思つてゐたんです

よ。」

といひました。

「何をですか？ 先生。」

と千代子は大村の方へ顔を向けました。

「私のために、あなたにまで心配をかけて、さぞ、あなたは私を怨んでおいでになるでせう？」

と大村は緑の花壇に静かに眼を投げながら、いひました。

「いえ。私は何とも思つて居りません。たゞ先生こそお氣の毒だと始終考へてゐるのでございますの。」

と千代子は却つて男らしい調子でいひました。

「さうですか？ あなたがさういつてくださると私も非常に安心です。どうかあなたは、あゝいふつまらないことに頭を悩まさずに充分勉強してください

さい。」

「え！」

と千代子は殆んど嘆息のやうに、

「でも先生世の中といふものはどうしてあんなつまらないことばかりいふものでせうね！」

「さうですね……。」

二人は長い間黙つてゐました。

(十二)

四年の後、三人の少女は——今はもはや少女といふやさしい名をつけるには適はしくない三人の少女は——再び故郷の古城の上に顯れました。

三人はもう廿歳になつてゐました。そして其内の一人は可愛い男の子を連れてゐましたし、もう一人は結婚して姓が異つてゐました。たゞ變らないの

は相馬愛子だけで、彼女は六年前と同じやうな元氣のある顔をしてゐました。

愛子は女子師範に優等で入學し、優等で卒業して今では縣下でも有數な模範教師といはれて居ます。愛子のお父さんは以前は酒ばかり飲んで愛子や愛子のお母さんを苦しめたのですが、愛子が卒業して町の教師になつてからはすつかり素行が改まり、今では酒も餘り飲まず、眞面目に働いて居ます。

「大村さん、こゝはいつ來て見てもいいでせう？」
と愛子は千代子に呼びかけました。

「え。ほんたうにいいことね！」

と千代子は四方の景色を眺めながらいひました。

千代子はいろんな経緯の後、結局兄にすゝめられて去年の夏、自分の恩師であつた大村と結婚することになりました。

「あの卒業式の日、こゝへ來てから、もうまる六年になりますのね。」

と千代子がいふと、洋子は自分の子供を草の上に遊ばせながら、

「さうでせうね。私なんか斯んな大きな子供があるんですものね！」

と嘆息するやうにいひました。

「大村さんだつて、もうちき赤ちゃんがお出來なさるわ！」

と愛子は快活にからかふやうにいひました。

「ほんたうよ。兩方とも美しい方だから、さぞ可愛い赤ちゃんがお出來なさることだでせうね！」

と洋子も笑ひながらいひました。

然しなせか、こんなことはみんな、千代子には悲しいことのやうに思はれました。そしてすべてのことは夢であつて。昔——十年前の昔の少女の心持になりたいやうな氣持になりました。

「あの頃は面白かつたわね、千代子さん！」
と突然洋子はいひ出しました。

「え。ほんたうにね！また昔のやうな子供の心持になつてあなた方と一緒に遊びたいと思ふわ！何も彼も忘れてしまつて！」
といつて千代子は洋子の手を握りました。

千代子は、聲をたて、泣きたいやうな氣持になりました。
たゞ愛子だけは、快活に口笛を吹いて草の上を歩いてゐました。

* * *

こゝまで話して、青年文學者は話を止めました。そして、いかにも疲れたやうに眼を青いテーブルの上に投げました。

「大變面白うございましたわ！三人の少女の運命！ほんたうに意味の深いお話ですわね。」

とこの家の一番大きい娘がいひました。

「子供に聞かせるには、少しむづかしかつたかも知れないが然し、面白かつた。」

と年老つた家の主人はいひました。

青年文學者は靜かに笑つてゐました。

—(をほり)—

大正十年三月五日印刷
大正十年三月十五日發行

定價金貳圓

著者 秋田雨雀
發行者 茅原茂

發行所 東京市本郷區弓町一ノ二五
日本評論社出版部

電話東京九六七八
電話小石川一九七一

東子の供へ

不許複製

印刷所

東京市小石川區
株式會社博文館印刷所
(印刷者) 萩原勝次郎

◆ 呈進第次込申キガハ復往一録目書圖 ◆

沖野岩三郎先生新著

繪入
童話

頬

白

の

歌

西村アヤ子裝幀 ◆ 四六大判函入頗美本 ◆ 價壹圓七拾錢 送料十五錢

坊つちゃん

嬢ちゃん

一番喜ぶ

芽出度い

初春の讀物

高き山の上、紅や白の美しい花の咲く頃、
上つて、黒い熊の腹から飛び出た、
ひりひりとした、高き石垣から、
を、見に行くと、高き石垣から、
て、細い帯、そして、高き石垣から、
狸の心、と、高き石垣から、
言つた、と、高き石垣から、
小供の心、と、高き石垣から、
二歳の子、と、高き石垣から、
物として、高き石垣から、

105

終

